

氏名(本籍)	関 沢 まゆみ (神奈川県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1680号
学位授与年月日	平成13年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	宮座の長老制と年齢観に関する民俗学的研究
主査	筑波大学教授 博士(文学) 真野俊和
副査	筑波大学教授 博士(文学) 古家信平
副査	筑波大学教授 博士(文学) 山本隆志
副査	筑波大学教授 文学博士 鳥越皓之

### 論文の内容の要旨

本論文は、近畿地方に特徴的な神社の祭祀組織「宮座」のうち、長老衆と呼ばれる指導的階層を内部に形成するタイプのものに着目し、長老制をめぐる村人の年齢観の特質を明らかにしようとした研究で、序章、終章を含む全4章から構成される。

「序章」は3節からなり、研究史を整理するとともに、年齢秩序が重視される宮座が存在する村落における村人の一生と年齢観を、宮座を担う人々の側に立った分析視点から明らかにしたいとする著者の研究目的が述べられる。

次いで各地の具体的な事例をもとに分析が行われるのは、第1章および第2章である。第1章「宮座の長老制と年齢観」では、宮座の運営における長老と座衆、とくに当屋との役割分担、ならびに宮座の年齢秩序の管理と年齢観の特徴を論じた。

第1章第1節「宮座運営と長老の役割—一老と当屋の分析から—」では、奈良市大柳生の「八人衆」と呼ばれる長老衆と「明神様」と呼ばれる春日社の分霊を1年交代で自宅に預かる当屋との関係について分析を行った。そしてこのような長老衆の存在する宮座では、「一老」と呼ばれる最長老への権威の集中という現象が顕著であることを明らかにするとともに、当屋をつとめることが長老衆への加入儀礼としての海をもつということ論じた。

第2節「長老と年齢の管理—一老と座人帳—」では、滋賀県湖東地域の宮座の長老と「座人帳」と呼ばれる宮座成員の記録簿との関係について分析した。長老衆、とくに終身制の長老衆が存在する宮座においては、座入りと同時にその人物の名前を最長老の「一老」が引き継いでいる帳面に記録していくという例が多くみられる。この座人帳に注目することによって、父系に基づきながら家を継承してゆく個人、という宮座の構成単位の特徴が明らかになった。そしてこの座人帳を引き継ぐ一老の果たす役割を、一老の生命力への尊敬と年齢秩序の管掌という観点から論じた。

第3節「村落における年齢の二つの意味—敦賀市白木の例より—」では、福井県敦賀市白木という村落の村落運営と神社祭祀における年齢の意味の対比を試みた。白木の村落運営において現在も機能している、戸主が60歳で隠居するという制度は、各家の世代交代を平等に行い、家々を秩序づけるための目的を有している。それに対し、神社祭祀において当人の順番を決定する年齢はあくまで個々人の序列を示すものであることを論じた。さらに長老と新生児を連結させる仕組みとして、「年齢の輪」と呼ぶべき仕組みが存在することを指摘した。

第4節「宮座における年齢秩序と老中―奈良阪の老中の分析から―」では、奈良市奈良阪の宮座について座衆の年齢秩序という視点から分析を行った。現行の老中の調査と寛政4年（1792）以来の座人帳の調査により、老中が神を祭る長老の組織から60歳以上の老人集団へと変化してきた点を明らかにする。しかし一方で毎年10月の例祭の夜、長老が新生児に「相撲の餅」を与える儀礼が継続されていることに着目し、この相撲の餅の授与とは長寿の生命力を新しい生命に与える行為に他ならず、この儀礼こそが例祭の最も重要な要素であることを指摘した。

第2章「長老衆と葬墓制」では、宮座祭祀の場の清浄性や長寿の生命力への尊崇とは対極にありながら、高齢者たる長老衆たちにとって必然不可避の事実である死・葬送・墓制への彼らの対処の仕方についてその実態の把握と分析を試みた。

第1節「宮座と葬墓制―奈良市大柳生の事例より―」では、第1章第1節でとりあげた奈良市大柳生の、死穢忌避観念を強くもつ宮座の長老自身にとっての死と葬送と墓地の設営について分析を行った。大柳生では埋葬墓地と石塔墓地とを別々の場所に設ける両墓制の形態をとっているが、両墓はともに集落から隔離された場所に設けられている。この事実から宮座祭祀と死穢忌避をめぐる問題を提起し、死穢忌避観念が集落から遠く離れた地点に墓地を設けさせるという墓地の立地上の特徴を作り出していることを明らかにし、両墓制と宮座祭祀との直接的な関連性を指摘した。

第2節「墓地の共同利用と年齢秩序―大和高原の諸事例から―」では、大和高原地域の村落における埋葬墓地の利用形態について分析を行った。これらの村落でも両墓制の形態がとられているが、埋葬墓地は村人の共有が原則であるため、利用にあたっては家や個人の事情よりも、村人としての年齢が優先されることが大きな特徴となっている。すなわち彼らの社会関係において年齢秩序を重視する価値観が、埋葬地の選定という墓地の共同利用の仕方にも反映しているものと結論づけた。

第3節「男女別・年齢別の墓地をめぐる問題―奈良市水間の事例より―」では、第2節で紹介した事例のうち、男女別、年齢別という基準によって埋葬墓地の運営がなされている事例の形成過程を検討した。ここでは明治20年代に墓地の移転があり、その移転にともなって男女別、年齢別という利用基準が設定されたことを明らかにした。

第4節「長老衆と死・葬・墓」では、長老衆の死と葬送、墓制への対応と死者供養の実態について考察するために、大和高原地域における盆行事の分析を行った。この地域では、家の先祖は座敷の仏壇に、新仏は縁側に、無縁仏は軒下にと、3種類の霊の性格によって区別して供養していること、またそれぞれの仏の性格に応じた祭り方がなされるという特色を抽出した。

終章「宮座・長老制研究の現状と課題」では、長老制の宮座を伝承する村落においては、長寿への憧れが一種の信仰のように人々の心をとらえている事実を指摘し、そうした価値観が宮座という習俗の源泉にあると結論づけた。

## 審査の結果の要旨

本研究は、従来の宮座研究が外部からの第三者的な視座による分析に終始しがちであった点を批判し、村人の立場にたった場合、宮座とはどのような機能と観念をもつ組織として具現するかを明らかにしようとした点に特色をもつ、意欲的な論文である。本論文の特筆すべき成果は以下のようにまとめられる。

①宮座の毎年の祭礼において供物の餅が1つずつ分配される儀礼とは、年玉の分配、すなわち氏神からの生命力付与の儀礼と考えられる。宮座における序列の上昇は年玉＝生命力を積み重ねるという加齢観念によって支えられ、やがて長老として指導制を発揮するに至る。

②長老の役割として長寿の生命力を新生児に与える儀礼が存在し、長老と新生児との結びつきが「年齢の輪」と

も呼ぶべき循環システムを形成する。

③年齢を最も多く重ねた「一老」を頂点とする長老こそが神祭りの役としてふさわしい人物とされ、宮座の存在する村落においてはそのような長寿に価値をおく年齢観が明確に存在し、年齢・生命力への尊崇の観念が長老衆の存在を支えている。

④長老衆が通夜や葬式そして墓地に行かないのは、村人の代表として宮座祭祀を行い、神役を担う立場にあるため、その宮座との関係において死穢をさけなければならないからである。そしてその死穢忌避の観念が墓地の立場にも影響を及ぼしている。

⑤長老制をしく村落においては、宮座だけでなく、葬送・墓制の習俗にもその年齢観が影響を及ぼしており、墓域を年齢によって区分するという事例はその典型的なケースといえる。

一方、若干の課題として次のような点があげられる。①著者の究明した世界が従来の宮座研究史の中でどのように位置づけられるのか、という点についての認識をさらに深める余地があったこと。②宮座の中に記述・分析をとどめることなく、それを成り立たせている社会全体への視点が必要であること、などである。

しかし、本論文が各地での綿密なフィールドワークをふまえることにより、従来見落とされていた「年齢観」という視点から新たな宮座論を構築した点で、学界に貢献するところ極めて大きなものがある。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。